戦時下の石川淳

――『渡辺崋山』における負の情念――

塩崎文雄

1

どれでもいい、手近にある文学全集もののなかから『石川淳集』を手にとって、巻末に付載されている年譜を繙けばすぐにわかることだが、その文学的出発においていくたびもの遷延を重ねたこの作家は、処女作『佳人』の発表後五年を出ないうちに、「『マルスの歌』の季節」に遭遇するので、さてこれからというときに、すなわち文学的野心の横溢する四十代の前半を、思想の「渇き」と文学活動の不如意とのたえざる痛覚のなかですごすこととはなる。「わたしの正気とは狂気のことであつたのか。(『マルスの歌』)という、答を用意することが敗退を自認することでしかあり得ない苛烈な自問を、あえてみずからに課さねばならなかった作家は、かかる時世に生まれあわせた身の不遇を嘲つよりも、せめてはかの蜀山人に倣って、「一番いいところは内証にしておき、二番目の才能で花を撒き散ら」(同前)す道をこそ択ぼうとするわけだが、にもかかわらず、「ひとびとを清澄にし、明確にし、強烈にさせるために今何がかけてゐるのか。」(同前)と問うてやまぬ、あるいは「威武を恃むもの」へのいらだたしさを隠し得ぬ作家は、この重苦しい季節において、みずからの精神の膂力の絶対的欠乏を痛感しつづけねばならないのである。そのためか、『白描』刊行以後、その実作は質量ともにさすがに乏しい。わずかに、『雪のはて』(昭17・7)と『明月珠』(昭20・3稿)とがあって、蜀山人および荷風に対するやみがたき景仰の念の表白を見ることができるのだが、『雪のはて』のおおどかな夢想の風景は、粉雪の降りしきる窓外の風に、たちまちのうちに吹き消されねばならぬし、「夜光璧、明月珠はひとのえがてにするもの」で、「わたしの小さいてのひらにやつとつかみうる」ものとては、自転車の把手に宿る月影よりほかにないとすれば、これらの作品は、ただ、作家の峻厳な自己凝視をなかだちとして、かれの精神のありかと、その健在とを占うよすがにとどまるだろう。

むしろ、この期の石川淳の真骨頂は、言うまでもなく、『森鷗外』(昭16・12)、『文学大概』(昭17・8)等の文学評論にこそあるのであり、筆者もまた、そのことにいささかの異論があるわけではないのだが、反面、かかる思想の不在の時代であるがゆえに、石川淳が小説的努力を逸早く放擲して、批評活動に韜晦した、という風には必ずしも考えない。現に、『森鷗外』等を単なる評論としてのみ局限的に捉えようとする形式論理に、すでに問題は伏在するのであって、これらの評論は、仮説から仮説へとすばやく飛躍する、いうところの「精神の運動」によって、すぐれて「小説的」でさえある。それだけに、ただ作家の精神のありかとその健在とのみを表出した片々たる象徴的小品を一方の極に据え、他方の極に、すぐれて「小説的」でさえあるこれらの評論を置くとするならば、その小説的努力を傾注し、実現するに足る様式の模索という作家のひそやかなもくろみを、戦時下の石川淳の文筆活動の奈辺かに想わざるを得ないのである。ここに、『渡辺崋山』をとりあげるゆえんである。

かつて、井沢義雄(ヨシオ)氏は『渡辺崋山』を評して、「要するに一伝記文学以外を私は見ない」とした。作品の出来栄えに関するかぎり、「えがき出された世界の、事物のおもみも人物の生彩」もふたつながら欠いた、「平板な絵模様」という井沢氏の評言はおそらく正しい。しかし、だからと言って、「伝記文学」の範疇に作品を封じこめていいわけのものではないし、まして、作品の不成功の要因を、「鷗外史伝の方法といわゆる歴史小説なるもののそれとのあいだ」に揺れ動く、作家のおよび腰の方法に求めるあたりは、いささか論の岐かれるところだろう。なぜならば、『渡辺崋山』刊行後、半年を置かずに『森鷗外』を世に問う石川淳であってみれば、『渡辺崋山』執筆時の作家の眼のはしに、鷗外史伝が措かれなかったはずはなく、その執筆の過程において鷗外論が熟成していったと考える方

がより自然なので、および腰の方法にもっとも自覚的だったのは、だれにもまして、石川淳自身だったろうからである。その辺の事情については、後年の執筆にかかわる「後記」によっても窺い得る。

書きながらも、書いてしまったときでさへ、このやうな仕方で書いたものかどうかと、拘泥するきもちが作者のうちにつづいた。てきめんに品物は伝記ともつかず小説ともつかぬものになったやうである。

「このやうな仕方で書いたものかどうかと、拘泥」しながらも、その「仕方」を根本的に改めようとしなかったのは、作家の怠惰などのせいではもとよりなく、そのような「仕方」によってしか把捉し得ないものが、言いかえれば、『渡辺崋山』の作品の出来栄えを犠牲に供しても悔いない別のなにものかが、作家によって仮想され、その実現が賭けられていたからにほかなるまい。もちろん、そうした作家の意図が作品のうちにめでたく具現しているならば、『渡辺崋山』は、「伝記」でも「小説」でもない、まさしく「散文」としか呼びようのないものになり得たのだろうが、現にある『渡辺崋山』が「伝記ともつかず小説ともつかぬもの」になっているとすれば、そこに託された作家の意図も未発のままに終ったということにでもなろうか。

それはともかく、『渡辺崋山』を、ひいては『義貞記』を、伝記もしくは軍記物としてあらかじめ作品論の対象から除外することなしに、そうした形式論理の枠内から一旦これらを救抜し、そこに働いた作家の未完の意図を闡明していく努力のうちにこそ、戦時下の石川淳の全貌は、一定の遠近法をととのえつつ、展望されるだろう。

ところで、『渡辺崋山』(昭16・3)も『義貞記』(昭19・2)も、いうところの時局迎合的な作品である。ことがらの一斑は、自家および自作に関して語ることにすこぶる禁欲的な石川淳において、この二作品が、はるか後年の執筆にかかわる「後記」ないしは「附記」を随伴することによっても窺い得よう。〈注2〉

しかし、「後記」および「附記」を仔細に検討すると、作品執筆に作家を駆り立てたものに関しては、両者はほとんど決定的にその位相を異にするのではないのか、少なくも、作家自身はそこにおよそ別途のものを認めたがっているのではないか、と推測されるふしが多分にある。たとえば、『義貞記』に関しては、「この一篇はわたしの戦中に於ける舞文曲筆であつた。」と断案を下して憚らぬ石川淳が、『渡辺崋山』については、「わたしはこの拙作についてはよいおもひでをもつてゐない。」としながらも、「これは曲筆といふこととはおもむきがちがふ。」と述べているあたりに、その端的な徴証がある。その辺の事情をさらに細かく述べれば、「わたしの意図は元来内容には係らなかつた。」「ただ形式。」「雅俗混淆の現代文をもつて軍記物様式に取りつかうといふところに当時わたしの息のつき場があつた。」という『義貞記』の執筆事情に向けられた作家の自己省察の苛烈さと、「この崋山といふものは書いておくに値する。わたしはこれを書くことにした。」とする『渡辺崋山』の執筆姿勢のうちにこめられた作家の含意とは、明らかに別様のものである。それゆえにこそ、『渡辺崋山』に対しては、はるか後年におよんでも、「現在のわたしはこの過去のユガミについて責に任ずることをよろこぶ。」と述べているのでもあろうか。さらに言えば、「このユガミは昭和十六年現在のものとして、わるい意味であらうと、時代的に無意味ではない。」とする作家の自恃は、「この崋山といふものは書いておくに値する。」とする、作品執筆時の石川淳の主体的判断のうちにこめられた意図とはるかに呼応しあっているということでもある。

それはともかく、ここに言う「過去のユガミ」とは何なのか。それが「時代的に無意味ではない」とすれば、それは何故なのか。つまるところ、「責に任ずることをよろこぶ。」として、まがりなりにも処遇されようとする『渡辺崋山』と、「作者戦中のやりくり算段」「身すぎ世すぎ」といった、軽妙な語り口であるがゆえに、それだけ苦渋に満ちたかたちで、作家自身によっても貶しめられようとする『義貞記』と、この二作品の間に横たわる、「謂ふところの非常時」の暗く、重い時間のなかで、石川淳がいかにあらがい、超脱しようとこころみ、にもかかわらず、押し流され、覆没せざるを得なかったかを、『渡辺崋山』を手がかりに考えてみたいと思うのである。

2

渡辺崋山に関しては、数多くの伝記考証をはじめとして、シーボルト事件と同様、政治疑獄の側面を多分に持つ蛮社の獄の真相の究明を目的とする歴史学的なアプローチ、絵画史の側面からの論及、といった風に、多方面からの研究が押し進められている。たとえば、伝記考証の面から言えば、森銑三氏の『渡辺崋山』(昭16・4)を、歴史学の方面では沼田次郎氏の『幕末洋学史』(昭25・9)、佐藤昌介氏の『洋学史研究序説』(昭39・5)を、絵画史研究としては菅沼貞三氏の『崋

山の研究』（昭22刊、昭44・4再版）、吉沢忠氏の『渡辺崋山』（昭31・11）を、それぞれの領域における代表的労作、目下の学問上の到達点としてあげることができる。こうした学問的な達成の上に、石川淳の『渡辺崋山』を置いて、作品の持つさまざまな「ユガミ」に考察、検討を加えていくことが、作品研究の一つの方向としては、たしかに可能なように思われる。しかし、石川淳の意図が、必ずしも綿密な伝記考証等にはない以上、ましてや、ここに言う「過去のユガミ」が、「昭和十六年現在」という時代を直接的に反映するものとして認知されている以上、そうした学問上の達成の高みから考証の杜撰さを、あるいは歴史の実態把握の浅薄さをあげつらってみたところで、それだけでは作品の特質は十分には明らかになってこないのではあるまいか。

周知のごとく、画家でもあり、田原藩三宅家という小藩にすぎぬとは言い条、それなりに有能な為政者でもあった、また、洋学研究の先駆的な唱導者でもあり、忠孝といった儒教的徳目の文字通りの実践者でもあった渡辺崋山は、鷗外における抽斎・蘭軒・霞亭といった、歴史の波に覆没した人物たちとはことかわり、その人物の実像、およびかれの置かれた歴史的・社会的・政治的与件からは切り離された地平で、言いかえれば、明治以降の日本の近代化のプログラムのなかで、その都度、時代の要請を直接的に反映し、きわめて便宜的に切り盛りされたかたちで、いわば〝光を掲げた偉人たち〟の一類型として、二宮金次郎、木下藤吉郎、野口英世等と並称されて、その伝記が編まれるといった事情があった。

このような崋山の取り扱われ方を顧みるとき、諸領域において達成された現下の学問的成果と、石川淳の『渡辺崋山』とを比較考究するよりも、時代的要請につれて生成、発展、もしくは変容してきた崋山伝の諸様相のなかに、石川淳の作品を据えてみることの方が、作品の持つ諸特性、諸問題を明らかにするためには、はるかに有効な方法のように思われるのである。

そこで、こうした目論見を実現するために、崋山伝の祖型として、藤田茂吉の『文明東漸史』にみえる崋山と、小学修身教材に出現する崋山と、この二つの崋山像を仮設してみたい。もとより、この二つの崋山像が、おびただしい類書をその圏内に包摂する崋山伝の全貌を覆い得るものでないことは、言を俟たない。以下の小論は、対極する二つの分光器を仮設することによって、石川淳の『渡辺崋山』が持つ諸特性、諸問題のいくつかを析出しようとするこころみにすぎないのである。

3

西教ニ係ル事ハ勿論凡ソ外国ニ関スル書類ハ、当時政府ノ嫌疑ヲ憚リシガ故ニ、詳細ノ事実ヲ記スル者尠ク、殊ニ華山等ノ大獄ニ由リテ、其人ト其事トニ関スル書類ヲ蔵ムル者ハ、皆一時嫌疑ヲ畏レテ或ハ焚却シ或ハ文章字句ヲ抹殺シ、甚シキハ之ヲ改竄スルガ如キモノアリテ、完本ヲ得ル」極メテ難カリシ（『文明東漸史』凡例）

とは、『文明東漸史』執筆の際における鳴鶴藤田茂吉の嘆きだが、崋山没後、三十年をあまり出ない幕末・維新期において、崋山も歴史の激変のなかにひとたびは置きわすれられ、その資料もほとんど湮滅の危機に瀕していた模様である。

『事実文編』巻六十六所収の、娶亭蒲生重章の「渡辺登伝」に見られる、「嗚乎世徒知二其画之為レ妙、而或不レ知二其壮節如レ此也一」の言によっても、画家としての崋山はともかくも、その他の側面はほとんど忘れ去られようとしていた当時の実情を知り得るのである。そこで蒲生は、「登倖微不レ能レ奉二養父母一、売レ画以給焉一」といった、崋山の父母に対する孝養の側面と、あわせて「癸巳至二田原一、巡二視封内及沿海諸島一、竊憂二海防一、乃画二海外各国船図及旗章一、以与二沿海戍吏一、既而帰二江戸一、又与二高野長英小関三英等一、講二究西洋事情一、遂著二駅舌或問、慎機論、夢物語諸書一、以譏二諷時事一、触二幕府忌諱一、己亥夏下レ獄一」のごとく、田原藩の海防政策から発して、洋学研究の必要性を悟り、ついには幕府の忌諱に触れていく崋山の事蹟の大概を述べる。しかし、蛮社の獄の実態については、ここではいささかも言及されておらず、また蛮社の獄にいたる崋山の事蹟の先駆的な意義についても、十分には把握されないままに、著者の関心はもっぱら、世路と時運とに遭わなかった崋山の、「至忠至孝」が翻転して「不忠不孝」に終らざるを得なかった、個人の宿命の嗟嘆へと向けられていくのである。

『事実文編』巻六十六所収の石川英「渡辺華山伝」は、蒲生のものと相前後して書かれたと覚しいものだが、嘉永・安政より始まり慶応戊辰にいたる幕末動乱の文脈の上に崋山を置き、「明者遠見二于未萌一、智者避二危於無形一」のごとく、崋山を世に先んじて国を憂う先憂の「仁人義士」として論定しようとする意図が明らかである点、「既而門生花井某者、貪レ賞譏二之幕吏一、因繫二囹圄一、（略）遂陥二誹政之罪一」のように、蛮社の獄の起因、内実等をさぐろうとこころみている点などに徴して、蒲生の崋山伝よりも一日の長が認められよう。だが、「清国鴉

片之乱、業已見二前車之覆一、豈其可二黙而止一哉、因作二慎機論、鴃舌或問等一、」のように、「慎機論」「鴃舌或問」の執筆と鴉片戦争との時間的な先後関係を誤まるといった、初歩的なミスをおかしていることなどに顧みて、この論定が、現実的な政治認識とはほど遠い、儒学者流の「先憂後楽」的な発想を、その培養土としていることは明らかだろう。

こうした趨勢のなかで、明治九年、棠陰清宮秀堅の『雲烟略伝』が世に問われるわけで、本格的な崋山伝の生成は、ここに緒に就くことになる。もっとも、『雲烟略伝』中の「渡辺崋山」の項が、「万延庚申夏五月」の識語を持つことから、その執筆は公刊に先立つこと一六年前にかかるということになろうか。ちなみに、『事実文編』巻六十六には、「渡辺崋山」中「崋山渡辺先生年譜」のみが載せられてある。

ところで、棠陰のこの年譜は、その末尾に、「往年余作二崋山先生小伝一、質二於小華一、小華言有二小誤一、因見レ示二国字年譜一且乞レ作レ譜、余諾不レ果、今拠二其年譜一作レ之」と断っているように、崋山の息渡辺小華によって示された「国字年譜」に依拠している。ここに言う「国字年譜」が、昭和十年代にいたってようやく陽の目を見た、崋山の女婿台川松岡次郎著すところの「全楽堂記伝」であり、『崋山全集』所収の「渡辺家系譜」もまた、「全楽堂記伝」の前半部であることが、その後の研究によって明らかにされている。

それはともかくも、以後の崋山伝の記述は、大半、棠陰の『雲烟略伝』にその源泉を仰いでいるので、たとえば『文明東漸史』の崋山に関する記述の大部分が、なかんずくその「外篇」に収録されている「渡辺登録」が、「崋山渡辺先生年譜」を祖述していることは、『文明東漸史』の「引用書目」中にこの書目が掲げられていることに徴しても、明らかである。

明治一七年九月に刊行された鳴鶴藤田茂吉の『文明東漸史』が、如上の三つの崋山伝に比して、一頭地を抜いた評伝であるのはもとより、それ以後のあまたの崋山伝に対して、多大な影響を与えているという意味でも、画期的なものであることは言うまでもない。この著書が公けにされた明治一七年秋と言えば、各地における諸激化事件を見易い露頭として、自由民権運動が最高潮に達するかたわら、自由党解党など、その退潮の徴候がはやくも顕在化する季節にあたるわけで、福沢諭吉門下の高足で、改進党系のすぐれた論客であった藤田茂吉が、崋山・長英の事蹟のうちに、自由民権思運動の思想的源流をたずねようとした意図は明瞭だが、この書の、以後の崋山伝の方向をほとんど決定づけるほどの画期性は、どこに求められるのか。以下、箇条書的に述べれば、およそつぎのようでもあろうか。

(1)「泰西文明ノ東漸セル起因成果ヲ明カニシ、読者ヲシテ、封建鎖国ノ世ニ当リ、泰西文明ノ進歩セル実勢ヲ知ラシム。」（凡例）などに見られるごとく、西洋を「文明」の地と規定するかたわら、「我国封建ノ時代」を「野蛮」もしくは「草昧未開」の地として前提していること。このような文明史観は、佐久間象山流の「東洋道徳西洋芸術」の概念をいっそう押し進めたもので、著者の藤田が、福沢諭吉の直接的な警咳に接していたことを証してあまりある。同様のことは、文明の「新説」「新業」「新思想」等の語彙を、ただちに「実学」ということばに置きかえている点などにも窺い得る。

(2)このような文明史観を前提に、藤田は、いわゆる「文明東漸」を、すなわち洋学のわが国への輸入を、ヨーロッパ近代思想のわが国への移殖とみなしていること。言いかえれば、洋学を日本の近代化の原動力・推進力として捉え、定位しようとしていること。こうした文脈の上に、崋山・長英の事蹟が置かれるとき、それらは「我国封建ノ時代ニ於テ、已ニ文明ノ新説ヲ社会ノ一隅ニ発顕セル踪跡ヲ考索スルヲ得タリ。」（自序）と捉えられ、あるいは、「其事態ヲ形容スレバ、恰モ草昧未開ノ空気ヲ以テ充満囲繞セルノ中ニ於テ、一穂文明ノ孤燈ヲ懸クルモノナリ。」（第九章　蘭学ヨリ発生セル新智識、政治ニ波及セル新思想）とたとえられることになる。

(3)いわゆる「新説」「新思想」を、単に「実学」とのみ規定するにとどまらず、幕藩体制下の分国主義に対置し、ナショナリズムの運動として位置づけようとしていること。たとえば、「蓋シ時勢ノ変故ニ遭フテ君ニ忠シ主ニ義アル臣僕、遂ニ其事ニ死スル者、古今其人ニ乏シカラズ。而シテ後人皆其事ヲ称揚シテ、史ニ載セ伝ニ記シテ事蹟彰著ナラザルハナシ。而ルニ国ヲ憂ヒ国ニ忠シ、遂ニ国ノ為メニ死シタルノ志士ニシテ、其人ト共ニ其功業ノ彰著ナラザル渡、高二氏ノ如キハアラザルナリ。」（自序）などの箇所に、その辺の事情はつまびらかだろう。これを崋山伝の側から言えば、従来、儒学的概念を借り来って、漠然と憂国もしくは慨世の「仁人義士」とみなされてきた崋山は、ここにあらためて、近代国家としての日本のなかに市民権をかちえたということである。

(4)如上の理由により、崋山・長英を、封建権力の犠牲に供せられた、ナショナリズムの早期の花とみなし、かれらの事蹟を顕彰せんとしたこと。この点に関しては、前項の引用文中にもその一端をかいまみることができるが、より明瞭には、「著者ガ本書ヲ編ムニ当リ最モ意ヲ用ヒタルハ、天保年間渡辺華山、高野長英ノ徒ガ、蘭学ヲ主唱シ罪ヲ幕府ニ受ケテ死ニ至ルマデ、千辛万苦シテ力ヲ国事ニ尽シタルノ経歴ニアリ。故ニ二氏ノ国事ニ関セル事蹟ヲ以テ、本篇ノ骨髄トナス」（凡例）の箇所に、著者の意図は明らかである。ちなみに、崋山・長英をことさらに顕彰しようとするところに、著者の主情的傾向が露わに看取できるので、そのことは自由民権運動家としての藤田茂吉の自己主張と明瞭に重なり合うだろう。

(5)林子平等の事蹟をそれなりには評価しつつも、それらをナショナリズムの萌芽にすぎないとするかたわら、崋山・長英の運動を、実際政治の現場に働いた、最初のナショナリズムの運動として宣揚しようとしたこと。このことについては、「子平ノ事蹟ハ、一人ニ関シテ他ニ及バズ」「殆ンド当時ノ政治ト相関セズシテ止ミタリ」とする反面、崋山・長英の運動を「現ニ実事ニ就テ説ヲ建テ、其行事ノ大ニ社会ニ影響シタル」と言い、「大ニ人心ヲ刺衝シテ活動ノ力ヲ与ヘタリ」（第十九章　天保末年ノ内情外勢）と述べているところにつまびらかだろう。

(6)このように眺めてくるとき、藤田茂吉にとって、蛮社の獄の意義はおのずから分明で、「新説新業ヲ起シ、実害虚構ニ成ル」「文明ノ新説野蛮ノ法網ニ罹ル」「苛法濫刑」等の、各章の見出しにも如実に窺われるごとく、それはまったく封建権力の捏造にかかわる、不当な弾圧にほかならない。さればこそ、罪なくして受難、迫害を蒙った崋山・長英には、著者の熱い涙が惜しげもなく灑がれるのである。

『文明東漸史』の持つ画期性は、如上の六点に要約されるように思われるが、そして、それらが崋山・長英の事蹟の把握としておおむね当を得ていることは言うまでもないが、それとともに、自由民権運動の思想的源流を崋山・長英のうちにたずねようとする藤田茂吉の性急な問題意識が、言いかえれば著者のやみがたき主観的熱情が、その実態把握にいくぶんかの「ユガミ」を与えていることも、また事実である。

その第一点は、尚歯会の政治団体的側面の強調もしくは拡大解釈で、尚歯会を幕府および諸藩の開明派官僚のあたかも政治諮問機関のごとくにみなそうとしている点である。そのことは、「於是乎華山、長英等ハ草莽ニ在リテ隠然国家ノ政務ニ参与スルノ勢力ヲ有シ、人ノ智識ヲ開発シテ世益ヲ補導スル務ニ任ゼリ。偉ナリト云フベシ」（第八章　諸般ノ芸術ニ関セル実学ノ勢力）等の箇所に明らかだろう。もちろんここには、明治十年代の自由民権運動家としての著者の気概と存在主張とが二重写しにされてこめられているはずで、それが、『文明東漸史』における、実際政治の現場に働いたナショナリズムの運動の宣揚、という一特性を生み出してもいるのだが、崋山像の実態把握という面に限って言っても、そうした側面の強調が、蒲生重章の提示した画家としての側面、父母に対する孝養の側面をとり落したところに成り立っていることも、また事実である。さればこそ、著者は『文明東漸史』「外篇」なるものを別に編んで、「二氏ノ行状ニ於テ、其国事ニ関スルモノハ、内篇中ニ記シタルヲ以テ一切之ヲ省キ、其一身一家ノ事態ノミニ係ルモノヲ採」（凡例）って、その「ユガミ」を弥縫しようとしたのだろう。

その第二点は、天保期の内外情勢、天保の飢饉を一徴表とする国内的危機感のたかまり、および、海防問題を露頭とする対外的危機意識の尖鋭化とともに、それらの打開策として、幕藩分国体制のいっそうの整備をはかろうとする守旧派官僚と、幕藩体制の再検討による絶対君主制への移行をもくろむ開明派官僚との政争、なかんずく守旧派官僚のまきかえしとして蛮社の獄はあったのだが、藤田が、それらの問題を、林家八代の祭酒述斎林大内記衡の次子で、大目附であった胖庵鳥居耀蔵を、あえて敵役・奸物に仕立てあげることによって、漢学と蘭学、守旧と開明、野蛮と文明、迫害と受難といった対立図式として、あざやかに描きわけた点に求められよう。「為人陰険猜忍、権畧ニ富メリ」（第十章　漢学ト蘭学ノ軋轢）といった鳥居の描き方にもその一斑は窺われるが、より明瞭なのは、つぎのような箇所だろう。

鳥居ノ属吏小笠原貢蔵、窃ニ此事情ヲ窺知シテ大ニ喜ビ、此レ平生ノ計ヲ施スノ時ナリ。江川ノ一派ヲ排擠スルハ正ニ此時ニアリト、陰カニ新島開墾ノ社中ニ加盟セル花井虎一（旗本ノ士ニシテ本丸ノ庭番）ト云ヘル者ヲ招キ、之ニ告ゲテ曰ク、（略）虎一之ヲ聞テ驚愕措ク所ヲ知ラズ、切ニ罪ヲ遁ルヽノ計ヲ求ム。貢蔵声ヲ低フシテ曰ク、余ニ一計アリ、足下若シ之ニ従ハヾ禍ヲ転ジテ福トナスノ慶アリト。（略）虎一、是レ一個ノ小人、其言ヲ聞テ深ク欣ビ、遂ニ鳥居ニ就テ之ヲ訴フ。（略）

鳥居ハ初メテ此告訴ニ接スルノ人ナリヤ。将タ曾テ自ラ製造セル物ヲ此時領取スルノ人ナリヤ。（第十一章　新説新業ヲ起シ、実害虚構ニ成ル）（傍点筆者）

ここには、鳥居と、その配下の小笠原貢蔵、訴人の花井虎一の三者によってめぐらされた卑劣な奸計と、醜陋なけだもの取り引きとが、「絵入読物」風のあざとさで描かれてある。もちろん、こうした「絵入読物」風の叙述があげる効果は甚大なので、鳥居が曝露的に、「絵入読物」風の敵役・奸物として描かれればその分だけ、鳥居像に明治十年代の薩長藩閥政府の官憲を二重写しにした読者たちは、反政府運動のなかに鼓舞されつつ組みこまれていくのである。その意味で、自由民権運動における藤田のアジテーターとしての敏腕は疑うべくもない反面、そこに描き出された崋山・長英は、その実像から乖離していかざるを得ぬ、という結果をも招来するのである。

総じて、『文明東漸史』は、かずかずの誇張と歪曲とを持ちながらも、ともかくも量的なまとまりを持った最初の本格的な評伝であること、著者のすぐれた問題意識につらぬかれているために、人物の輪廓がきわめてあざやかであること、などによって、今日でもその画期性を失わない。『文明東漸史』の論定と評価とが、その後に生まれた教多くの崋山伝を裨益し、灌漑しつづけているゆえんである。現に、石川淳の『渡辺崋山』も、その流域に生まれた作品の一つと目される点がいくつかあるのだが、それは章を改めて、のちほど触れることにしよう。

4

幕末・維新期の、激変する時代の波間に覆没し、忘却されようとした崋山を、あらためて掘り起し、その論定と評価とをこころみたのは自由民権運動の側であったわけだが、明治二十年代になると、体制の側からの崋山の復権と再評価とが始まる。明治二四年一二月一四日、崋山に正四位が特旨贈位されるのである。

崋山への特旨贈位の問題は、崋山という一個体の復権、再評価の問題にはもとよりとどまらないので、明治二十年代前半期における、明治国家の体制の一応の確立、それにつぐ再整備、といった文脈のなかで論じられるべきことがらだろう。現に、明治二三年を分水嶺として、それ以前の贈位者数はきわめて少なく、かつ贈位は維新の功臣が死去した都度、個別に行なわれていたのに対して、それ以後は、贈位者総数が飛躍的に増大するのみならず、同日附で、維新前に没した広範囲の人物たちへの一括した大量贈位が始まる。こうした傾向は、明治二二、三年の交における明治憲法の発布、軍政改革の完了、国会開設等を徴表とする、明治国家の体制確立の一応の完成と、無関係ではあり得ないだろう。[注5]

崋山への特旨贈位の問題に立ち帰って言えば、崋山は、明治二四年一二月一四日、他の維新尊攘志士一五一名とともに、明治天皇の名によって、正四位を追贈されるのである。これをつづめて言えば、それこそが『文明東漸史』の中心命題であったところの、崋山等の運動の先駆性がおのずからに内包する体制批制の毒が、幕藩体制に向けられたそれとして局限的に意味づけられ、転轍されるとき、体制批判的な要素は著しく矮小化され、稀釈化されるわけで、すなわち、藤田茂吉がこめようとした、崋山におけるナショナリズムの両義性は尊攘論一般に単一化され、換骨奪胎されて、明治維新に順接的に接合されることになる。そのとき、崋山は、ふたたび慨世憂国の「仁人義士」として捉え直されることによって、明治国家のなかに戸籍を与えられるとともに、貧窮のなかでの刻苦勉励の生い立ちと、忠孝両全の行実との二側面がことあらためて付け加えられることによって、やがて、修身科教材の一方のチャンピオンとして、二宮金次郎や木下藤吉郎とならんで、立身出世の夢想の供給を通じて、民庶の上昇欲求の体制秩序への誘導水路の役割を果すことになるのである。[注6]

修身科教材に崋山が登場するのは、特旨贈位からかぞえてほぼ十年後の、明治三三年の検定教科書『新編修身教典尋常小学校用巻三』に始まる。以後、第一期国定教科書において、崋山はひとたび姿を消すが、第二期国定教科書において再登場し、戦時下に編まれた第五期国定教科書にいたってふたたび姿を消すまで、つねに登場しつづけるのである。もちろん、その間における崋山の取り扱われ方は必ずしも一様ではないので、国家的要請と社会状況の変化につれて、その様態に微妙な揺れを示すわけで、それ自体、すこぶる興味ある課題なのだが、論の多岐に渉るのをおそれて、ここでは明治三三年発行の検定教科書と、昭和一二年発行の第四期国定教科書とに、言及するにとどめたい。[注7]

検定教科書『新編修身教典』は、修身教科書の全体の流れのなかに置いてみても、きわめて斬新な特色を持つもので、二宮尊徳、熊沢蕃山、貝原益軒、渡辺崋山

等にそれぞれ数課が割かれ、人物の伝記をもって道徳の内容を整えようと意図したものである。このような伝記中心主義、人物中心主義の編集方針は、後述の第四期国定教科書の、崋山伝に該当する「孝行」「兄弟」「勉強」「規律」といった徳目中心主義の項目の立て方とは、きわだった対照をなしている。そのことを顕著に反映して、各種の徳目が各人の伝記の陰に逼息している点と、家・家郷・国家といった集団への帰属原理よりも、個人の自立の原理の方がやや優位に立っている点とが、その見易い特色としてあげられよう。

崋山は、『新編修身教典』巻三の第十三課から第二十二課まで、「渡辺崋山先生」という総題のもとに、八課にわたって取りあげられている。ここで、課の総数と崋山に関する項目数とが合致しないのは、伝記中心の記述の流れのなかに、「第十六課　兄弟に友なれ」「第二十課　親に孝なれ」の、徳目を中心とする二条目が挿入されているためである。それはともかく、記述の大概は、崋山の刻苦勉励の生涯を緯に、親兄弟への孝悌を経にして進められているのだが、その一斑は、およそつぎのようである。

第十四課　渡辺華山先生㈡

先生、十二歳のとき、ある日、何心なく、日本橋へんを、とほられけるに、むかうより来る、大名のぎょーれつのじゃましたりとて、そのさきどものものに、うたれぬ。

先生は、「おなじ人げんにてありながら、かかるはづかしめをうくる、ざんねんさよ」と、くやしなみだに、くれたりき。しばらくして、先生は、心をとりなほされて、「いざ、われも、ふんぱつして、一かどのすぐれたる人となり、人のあなどりを、うけざるほどのものとならん」と、志をさだめたまひ、いふべからざるなんぎにたへて、べんきょーせられしかば、その学問、大に進みたりき。（傍点筆者）

これは、崋山の立志の事情を述べた箇所だが、「おなじ人げんにてありながら、かかるはづかしめをうくる、ざんねんさよ」とか、「いざ、われも、ふんぱつして、一かどのすぐれたる人となり、人のあなどりを、うけざるほどのものとならん」とかには、はるか明治初年の、『学問のすゝめ』や『西国立志篇』の発想がさながらに息づいている。そして、こうした個人の自立の覚醒と、たゆまざる努力のはてには、「自助クル、人民多ケレバ、ソノ邦国、必ズ元気充実シ、精神強盛ナル事ナリ」「一身独立して一国独立する事」などいう中村敬宇や福沢諭吉のアジテーションを俟たずとも、当然、一身の栄達とそれに対する国家的褒賞とが約束されているはずで、検定教科書は、バラ色の未来図をつぎのように描き出してみせる。

第二十二課　渡辺華山先生㈥

先生、後に、おらんだの学問を習ひて、外国のありさまを知り、国の守りの、大切なることをさとり、外国のはたじるしをかきて、これを、うみべを守るやくにんに、示されき。

それのみならず、其のころの人の外国のことを知らざるをうれへ、いろ〳〵の本を書きて、これをさとされき。

今上天皇陛下には、先生が、国のために、つくされしことを、嘉せられ、正四位を、おくらせたまひき。

ちなみに、伝記中心の記述の流れのなかに挿入されている、「兄弟に友なれ」「親に孝なれ」という徳目中心の二条目も、仔細に点検すれば、「兄弟相愛し、相たすけて、家業をはげみ、家をおこさば、父母のよろこびは、いかならん」や「父母は、また、その子のしゅっせを、ねがはるゝものなれば、子たるものは、各、学をはげみ、業をつとめ、世にたふとばるゝほどの人となりて、父母の名をも、あらはすべし。これ、孝の、最も、おほいなるものなり」などの語句を認めることができる。これらを、国定教科書の「孝ハ親ヲ安ンズルヨリ大イナルハナシ」と読みくらべれば、その相違は明瞭で、さればこそ、検定教科書の特色の一つとして、集団への帰属原理よりも、個人の自立の原理の方がやや優位に立っている観がある、とさきほど述べたゆえんである。

そして、こうした教科書が編まれた背景には、はるか明治初年の立身出世主義の残照と、日清戦後のあらたな国家的興隆とが微妙に反照し合っている社会状況を認め得るように思われるのである。国民の「元気」と邦国の「元気」とが幸運なる一致調和を見せ、たまたま落ち合ったところに、つかの間の明治の青春が現出した、と言いかえても、あるいは同じことだろう。

昭和一二年に刊行された、第四期国定教科書『尋常小学修身書巻四』は、「孝行」「兄弟」「勉強」「規律」といった表題のもとに、崋山伝の記述が進められているところから見て、完全な徳目中心主義による編集であることを、その第一の特色とする。あわせて、それらの徳目を通じて、家・家郷・国家といった集団

への帰属を、とりわけ家への帰属を、個人の自立よりも優先し、強く要請していることと、それらの徳目が、最終的に目標とする立身出世のための階梯・プロセスとして認知されることなく、むしろ、徳目自体が自己充足的なものとして目的化されていることとを、見易い特色として具有している。以下、国定教科書における巣山伝の叙述に即して、若干の考察を加えてみたい。

巣山の呼称は、検定教科書の場合、「渡辺華山先生」もしくは「先生」であったのに対して、国定教科書では、単に「渡辺登」ないしは「登」にすぎないので、この事実は、豊太閤が木下藤吉郎に、二宮尊徳が二宮金次郎に改められた事実と正確に照応する。学習主体が児童生徒であることに鑑みれば、功成り名遂げた「渡辺華山先生」よりも、一介の「渡辺登」の方が、児童生徒の目下置かれている立場には似つかわしい、と言ってしまえばそれだけのことだし、たしかにそうした理由が伏在するにはちがいあるまいが、やはり、ここに認められる力点の移項は軽々には見逃しがたい。こうした力点の移項によって、立身出世の可能性は、容易に到達しがたい夢の領域にまでひきあげられ、かわって、眼前の徳目のみが必ず守らねばならぬ規範として、児童生徒の前面に大きく立ちはだかり、かれらを叱咤してやまないからである。あるいは、個人の矮小化が著しく進捗したと言っても同じことで、行動の現場において、それら心構えとしての規範に違犯することを余儀なくされる個人は、つねに自己勉励と自己処罰との意識にさいなまれつづけることとなるからである。

同様な改竄は、いたるところに見出すことができる。検定教科書の、「いざ、われも、ふんぱつして、一かどのすぐれたる人となり、人のあなどりを、うけざるほどのものとならん。」云々の、巣山の立志譚は全面的に削除されるし、そうした立志の必然的な到達点として遠望されていた、巣山の一身の栄達とそれに対する国家的褒賞も、つぎのような、概念化され、空無化された叙述に改められる。

かように登は、日々の仕事をきめて、規律たゞしくしたので、画が大そう上手になつて、人々にもてはやされたばかりでなく、学問も進んで、世間のためになりましたので、りつぱな人としてうやまはれました。（第七　規律）

検定教科書にあったのは、現状としての貧困と窮乏、それゆえの人々のあなどりとはずかしめ、発奮と立志、刻苦勉励、そのはてに約束されてある立身出世と国家的褒賞、という多段的ではあるが、それなりに明快な直線的構図としての、現状否定とそこからの脱却とであった。ところが、国定教科書は、現実の不如意、不条理に向けられた、はげしい怒りの発現としての発奮・立志の項をそこから奪ったばかりでなく、立身出世とそれに対する国家的褒賞といった、きわめて現世的な到達目標をも、「りつぱな人としてうやまはれました。」といった、索漠たる理念にすりかえてしまったのである。ちなみに、巣山の洋学研究が持った先駆性と、それゆえの批判性とはことごとく抹消されるので、「学問も進んで、世間のためになりました」の語句には、その片影もとどめてはいないのである。

要するに、検定教科書から国定教科書への改訂の過程のなかで、巣山伝は、そのうちに内包する体制批判の契機を根こそぎ剝奪される。後に残されたのは、所与の現実における自己充足、すなわち、現状の甘受と、現状のうちなる勤勉・努力であり、言いかえれば、心構えの重視と根性の倫理化とである。そこに描き出された巣山のおもかげは、大略、つぎのようである。

第六　勉強

登は、人のすゝめにより、或師匠について画を習ふことになりました。登は、母からわづかな金をもらつては紙を買ひ、夜昼ねつしんにけいこをしてゐましたが、師匠に十分のおれいをすることが出来なかつたため、二年ばかりでことわられました。登は、一日も早く上手になつて、父母に安心させようと思つてゐましたから、大そう力を落して、泣き悲しみました。父は、それを見て、

「それくらゐのことで力を落すやうでは、だめだ。外の師匠について、しつかり勉強するがよい。」

と言つてきかせました。

登は、父のことばにはげまされて、又外の師匠につきました。其の師匠は、気のどくに思つてしんせつに教へてくれ、登も一心に勉強しましたので、画がぐんぐん上手になりました。そこで、登は、画をかいてそれを売り、うちのくらしを助けながら、なほねつしんにけいこをはげみました。（略）

カンナン、汝ヲ玉ニス。（傍点筆者）

ここに認められるのは、登の置かれた、貧困・窮乏の強調である。「母からわづかな金をもらつては紙を買ひ」や「師匠に十分のおれいをすることが出来なかつた」というところにも、そのことは窺われるが、そのほかにも、「十四歳の頃、家がまづしい上に、父が病気にかゝつたので、くらしは一そう苦しくなりました。」（第四　孝行）、「登のうちには、登をかしらに、たくさんの子供があり

ました。うちがまづしい上に、父が病気になつたので、父母は、みんなの子供をやしなふことが出来ず。」（第五　兄弟）等の箇所にも、繰り返し述べられている。

こうした貧困・窮乏のゆえに、登は現実の不如意、不条理に出会うことになるので、師匠から「二年ばかりでことわられ」るのである。しかし、すでに述べたように、発奮・立志の機会を、かれはあらかじめ奪われている。同様のことは、この「勉強」の項に相当する、検定教科書の記述との差異からも言えるので、その箇所を参看すれば、つぎのようである。

其の時、父は、先生をはげまして、「これしきのことに、力をおとすは男子にあらず。すみやかに、ほかの師しょーにつきて、今までよりも一そー勉強し、彼のものに、まさらんことを心がくべし。」と、いはれければ、（略）（傍点筆者）。

国定教科書の場合は、ここから「彼のものに、まさらんことを心がくべし。」の語句が削除されているだけにすぎないが、この見かけ上の小異は、実はきわめて重要な意味を孕んでいるのであって、前者はおのれを謝絶した師へのはげしい怒りと、師の否定とを内包するが、後者からはそうした批判的な観点といったものの芽生えていく土壌が、慎重に除去されているのである。

このように、現実の不如意、不条理に向けられた怒りの発現としての発奮・立志の機会をあらかじめ封殺された登は、所与の現実を甘受せざるを得ないで、かれの表情はいきおいかなしみの色を帯びざるを得ない。「大そう力を落して、泣き悲しみました。」の箇所は、まさに好箇な一例だが、別に父の死にあたって、「登の悲しみはたとへやうもなく、父をしたふ余りに、泣きながら、ふでをとつて父の顔かたちをうつしました。」（第四　孝行）といった箇所や、また、貧困のために弟妹と離散せざるを得ぬ情景を述べた、「登の目からは、あつい涙がとめどもなく流れました。別れた弟の姿があんまりかはいさうであつたので、登はいつまでも其の時のことを思ひ出して悲しみました。」（第五　兄弟）という箇所がある。現実の不如意、不条理に対する怒りの発現としての発奮・立志の機会があらかじめ封殺されるとき、それは鬱屈し、低迷したエネルギーとして、個人の内部に蓄積されざるを得ないので、やがては体制秩序を根底から覆す兇暴なエネルギーとして暴発するだろう。それを未然に防ぐ手近な方法としては、涙による浄化が考えられるわけで、かれのかなしみの表情はそのための安全弁だと言っても同じことだろう。

しかし、それだけで穏便に、ひとびとの鬱屈したエネルギーが拡散するはずもないし、また、そうした感傷のなかで、国民の「元気」自体が沈滞して行くならば、体制秩序の護持にはいたって幸便だが、邦国の「元気」にとってはまことに困った事態だと言わざるを得ないので、そのためにも、新たな努力目標がぜひとも仮設されねばならないだろう。そこに、維新の転換期、および明治の青春においてのみリアリティを持った立身出世主義が、社会状況に合わせるかたちで縮尺されて提示されるので、家の安泰、家の再興といったものとして、それは現われる。個人の自立の原理にかわって、とりわけ家といった集団への帰属原理が強く要請される理由がそこにある。それはまた、立身出世主義が捨てて顧みなかったものへの回帰といった、相互補完的なリアクションの面も持つのだが、その点に関しては、論の多岐に渉るのをおそれて、指摘するだけにとどめたい。

いずれにもせよ、「夜昼ねつしんにけいこをしてゐました。」「一心に勉強しました。」「なほねつしんにけいこにはげみました。」といった勤勉・努力は、立志の機会を失うことによって、低迷・鬱屈するのではなく、「一日も早く上手になつて、父母に安心させよう」「うちのくらしを助け」ようといった、新たな努力目標を与えられることによって、ふたたび喚起され、誘導されていくことになるだろう。父母兄弟に対する孝悌の徳目が力説されるゆえんである。

要するに、検定教科書に出現する畢山が、明治初年のオピニオン・リーダーたちによって鼓吹された立身出世主義をさながらに体現する、いうところの立志伝中の人物であるとするならば、国定教科書における渡辺登は、貧窮にもめげずに、病弱の父母を扶け、兄弟をいつくしみつつけなげにも生きる、いわば孝子伝中の少年だろう。

総じて、これら修身教科書に底流しているのは、体制秩序の底辺を構成する民庶に、概念化、空無化した立身出世の夢想を、あるいは忠孝等の美徳をたえず供給するかたわら、その過程における抑圧を必然化、正当化し、体制批判の観点を根こそぎ剝奪しようとする意図である。言いかえれば、多くの民衆の置かれつづけている貧窮等の現状は、体制側の責任というよりも、個人の忍耐、努力、勤勉等の欠如のためだとする論理であり、さらに言いかえるならば、畢山は貧窮にもめげずに偉くなったのではなく、真に偉くなるためには貧窮である必要があるとする考え方である。こうような倒立した論理のもっとも集約的な現われこそ、前掲の引

用文の末尾に掲げられている、「カンナン、汝ヲ玉ニス。」ということばだろう。

以上、修身科教材において醸成された崋山伝の大概を窺ってきたわけだが、日本の近代化の歩みに伴って生成、発展、もしくは変容してきた崋山伝の位相のなかに、小学児童生徒向けの、いわば婦女童幼を教導するための崋山観を混入するのは解せぬ、『文明東漸史』と修身教科書とを同日に論ずるのは玉石混淆もはなはだしい、と考えられる向きがあるかも知れない。しかし、こうした疑義には、かなり容易に答えることができるのである。

最初に就いた師匠からは、附届が十分でないといふ露骨な理由のために断られて、まだ十代の少年だつた崋山は、この時ばかりはどうしようかと泣き沈んだことをまた自ら告白してゐる。艱難汝を玉にすといふが、崋山ほどの艱難に鍛へられてその人物を大成した人は、多くはなかつたであらうと思はれる。[注8]（森銑三『渡辺崋山』昭16）（傍点筆者）

彼は息子の顔を見つめながら呼びかけた。「お前、こんなことでしよげては駄目だぞ。こればかりのことに気をおとすようでは、すぐれた人間にはなれぬ。艱難汝を玉にす。な、艱難をかさねてこそ人間はえらくなれる。もつと奮発心を出すがいい！」[注9]（藤森成吉『渡辺崋山』昭16）（傍点筆者）

前者が、伝記考証としてもっともすぐれた収穫の一つであることは、すでに述べた。後者が、近来の杉浦明平氏の作品とならんで、戦前を代表する崋山伝の小説化であることは、贅言する必要もあるまい。しかも、この両書が、修身科教科書の、なかんずく前掲の「第六　勉強」の項の、直接的な影響下にあることは明らかである。その叙述に促されて、両書ともに、「カンナン、汝ヲ玉ニス。」の諺を織り込んでいるからである。念のために、これらの叙述の原拠になったと覚しい、崋山自身の『退役願書之稿』の当該箇所を掲げておけば、つぎのようである。

然処、貧人にて附届不二行届一とて、僅二年にて師家より断りを受申候。私も此時は如何可レ仕哉、泣しづみ候処、親父申候は、金陵事は御両敬大森勇三郎様之御家来にて、其旨申たらば、憐み可レ申、申により、弟子と相成候処、金陵殊之外相憐、少々は出来候様に相成候[注10]

ここからは、父子ともどもに途方に暮れた顔付は想像できても、あるいは宿痾のゆえに他人の好意、憐愍に期待するところの多い病父の性格は知り得ても、検定教科書風の「彼のものに、まさらんことを心がくべし。」といった鞭達の光景はおろか、国定教科書風の訓辞的情景すら、いささかも窺い得ない。にもかかわらず、森銑三の著は、訓辞的情景を明らかに宿し、藤森成吉の作品には、訓辞と鞭達とがふたつながらに描きこまれてある。このこと一つを例にとってみても、修身科教材に描かれた崋山が、その後に著された崋山伝に対して、いかに多方面に渉って、深甚な影響をおよぼしたかを、十分に諒解できるだろう。それゆえにこそ、修身教科書に出現する崋山もまた、崋山伝の一類型としてのみならず、崋山伝の祖型として、藤田茂吉の『文明東漸史』と並列させて取りあげる必要があるのである。

5

石川淳の『渡辺崋山』は、昭和一六年三月、書きおろしの単行本として、三笠書房から刊行された。「そこに崋山といふはなしが出たのは当時の版元三笠書房の註文であつた。」とは、筑摩叢書版『渡辺崋山』（昭39・3）の「後記」中に見出せることばだが、この作品が、まずは書書估の需めに応じて着手され、ついで、「芸術の迫害者に対して、これを芸術家の典型として立てる」、「そのころ横車を押してゐた官製の通俗道義観に赤恥をかかせる」といった作家の「配慮」が遅れて補塡された、という執筆事情は、十分に銘記しておいてもいいことだろう。

ところで、昭和一六年というこの時点に、何故、ことあらためて崋山なのか、といった問がすぐに惹起してくるはずだが、その辺の事情をやや口早に説明してしまえば、出版界をはじめとする各界の、いわば崋山ブームとでも呼ぶべき現象を指摘できるので、石川淳に対する書估の需めも、そうした現象の一端として捉え得るように思われる。

この時期の崋山ブームの要因は、ごくおおまかに言って、二つある。昭和一六年時点と言えば、ことさらに贅言するのも憚られるほどなので、これもまた作家自身のことばを借りて説明にかえれば、「当時すでにシナのいくさは泥沼に落ち、やがて太平洋に事あらうとするまぎは」であった。こうした対外的危機感のたかまりを顕著に反映して、崋山はあらためて人々の意識の水面に浮かびあがってくるので、崋山の復権、再評価が声高に唱えられる理由の一つは、おそらくそこにある。ちなみに、対外的危機感の昂揚と崋山の再評価の気運との間に認められるパラレルな関係こそは、崋山の主張、および尚歯会の運動自体がすでに内包

していたものにほかならなかった。たとえば、『慎機論』の一節には、つぎのようにある。

今天下五大洲中、亜墨利加・亜弗利加・亜〔烏〕斯太羅利三洲は既に欧羅巴諸国の有と成。亜斉亜洲といへども、僅に我国・唐山・百爾西亜の三国のみ。其三国の中、西人と通信せざるものは、唯我邦存するのみ。万々恐多き事なれども、実に杞憂に堪ず。論ずべきは、西人より一視せば、我邦は途上の遺肉の如し。餓虎渇狼の顧ざる事を得んや。〈注11〉

さればこそ、ナショナリズムの昂揚の季節において、その都度、崋山は復権、再評価される、といった経緯が従来もあったのである。〈注12〉そして、「シナのいくさは泥沼に落ち、やがて太平洋に事あらうとする」このたびの『マルスの歌』の季節」においても、国民精神発揚の呼号に、崋山が無縁でいられるはずはないのである。

しかし、ことが国民精神発揚のためだけだとするならば、吉田松陰でも、佐久間象山でも、あるいは梁川星巌や橋本左内であっても、一向かまわないはずである。現に、これらの人物たちの評伝も陸続として上梓されていたのが、当時の実情であった。崋山ブームが現出した今一つの理由は、昭和一六年がときあたかも、崋山自刃の年天保一二年からかぞえて、ちょうど一百年目にあたるためであった。この時期、明治四三年に刊行された『崋山全集』全二巻が、合釘本として装いもあらたに再版されたのを見易い徴証として、崋山の顕彰をこととする崋山会の活動にはすこぶる旺盛な観があるので、他にも太田鐐太郎の『渡辺崋山』（昭14・9、昭15・3増補版）や、鈴木清節の『先覚者渡辺崋山』（昭16・2）や、井口木犀の『崋山掃苔録』（昭18・3）等、多くの出版物をかぞえることができる。

こうした二つの要因が複合し、合流したところに現出したブームを背景として、さきに触れた森銑三や藤森成吉の著書も公刊されるわけだし、これらの著書の出現によって、崋山ブームはいっそう煽られていくので、そうした趨勢に便乗しようとする書估の誅求に応じて、石川淳の『渡辺崋山』もまた、世に問われるのである。

結論に先まわりして言えば、石川淳の崋山伝には、三つのきわだった特色が認められる。その第一点は、筑摩叢書版の「後記」に、崋山を「非の打ちどころなき理想的人格に仕立てることに踏みきつ」た云々の辞句があるのだが、まさしく作家の言の通りで、ここに見受けられる崋山は、間然するところのない「理想的人格」として描かれている。第二点は、このことは修身教科書における崋山伝との比較の上からはじめて言えることだが、崋山の前半生において、貧困・窮乏等のいわゆる「艱難」が果した役割の軽視、とまでは言わないにしても、少なくもその稀釈化が意図的にはかられていることである。第三点は、これは『文明東漸史』との対比において言えば、鳥居耀蔵、小笠原貢蔵、花井虎一が蛮社の獄において演じた、醜陋な役割の踏襲と強化とである。以下、如上の三つの特色について、若干の補足ないしは注釈を施すといった手順で、考察を加えてみたい。

崋山が「非の打ちどころなき理想的人格に仕立て」あげられている、といった第一の特色については、作品の劈頭の一節につぎのようにあることによっても、たやすく首肯できよう。

生れた時に、眼が開かなかつた。栄養がよくなかつたせゐであらうと云はれる。眼のことはともかく、たしかに家中に栄養が行きわたつてゐない実状であつた。そのくせ、両親とも血統正しく、家格卑しからず、心にも生活にも潰れのない人々であつた。しかし、眼はやがて開いた。きれの長い、ふかぶかと温い眼で、後年椿椿山が描いた肖像の、当時四十六歳の軀幹胖かなる人物の、あの美しい眼がここに初めて開き、もう人間の世界で消えつこない星であつた。（一　出生）〈注13〉

また、崋山二歳のとき、観相の学に達した根津新幡随院の和尚が崋山を見て言ったと伝えられることばも、「いい子だ。立派に成長することしか知らない。だが、人間が立派になるにつれてそれだけ余計に不幸の量を背負ひこまされることになるらう」（一　出生）といった具合いに紹介されるのだが、これを『雲烟略伝』の「此児成長後、必成二名於天下一、痘非レ所レ患、所レ患或罹二奇禍一耳」と読みくらべれば、その特性は分明だろう。あるいは、谷文晁の出格の知遇を述べた、「おそらく文晁をまつさきに打つたのは、崋山の画技よりも、その人物のはうであらう。」（四　文晁）の箇所や、ひたすら自分の頭脳を恃んだ長英の、崋山への心服のありさまを語った、「長英を打つたのは此世ならぬものであつた。人間の世の中はこゝに来て高まるであらう、弱い者はすべてこゝに来て泉を汲むであらう、さういふ美しいものであつた。すなはち、芸術を生むところの、高貴なるたましひであつた。」（九　長英）の箇所には、そこに働いている発想の類似から見

ても、崋山を「非の打ちどころなき理想的人格に仕立て」あげようとする、作家の一貫した意図の伏在を認め得るだろう。なかんずく、崋山の獄中生活を概括した、「しかし、この時、崋山は既に神仙伝中の人物である。肉体を振り切つたところから、精神は高く飛翔しようとする。押し掛けて来た悪条件にとんだ恥を掻かせて、写生図は珍事に富み、書簡は常よりも暢達で、暗夜清香、全楽堂の面目こゝに極まつた。」（二十六　暗夜清香）といった箇所があるが、これはもう、崋山の獄中生活の実景などとはおよそ無縁な、かくあり得べき、作家の、精神の夢の記述にほかなるまい。〈注14〉最後に、作品の掉尾の一節を掲げれば、つぎのようである。

翌十一日、正午、小屋の中に、崋山はうつ伏せに倒れてゐた。伸びた長身の、その頭のところは畳いちめんの血で、祐国の刀もともに血にまみれ、咽喉を突いて死んだやうな、一見何か優しげな感じであつた。しかゝ人が抱き起した時、隠れてゐた胸の下の、袴に、畳に、朱を叩きつけて、鮮血が匂つた。明かに咽喉を突く前に、作法どほり、利刃いさぎよく、腹一文字に切つて、みごとな最期であつた。（三十一、この人を見よ）

これらを要するに、開巻第一行目から掉尾の一節におよぶまで、天稟の資質、平素の行蔵のただしさ、当代の名流との往来、為政者としてのとりおき、洋学研究の動機の清潔、芸術境における遨遊のありさま、進退・処決のいさぎよさ等のことごとくは、あげて崋山の「理想的人格」を語るために、引きあいに出されたふぜいである。

ところで、作家の、精神の夢としての「理想的人格」という概念に遭逢するとき、読者はおのずからに、同じ作家によって、ほとんど同じ時期に書かれた、『森鷗外』を想見しないわけには行かない。にもかかわらず、『渡辺崋山』は、『渋江抽斎』はおろか、『伊沢蘭軒』にも『北条霞亭』にもおよばない。およばない理由は、抽斎・蘭軒・霞亭とならべてみて、崋山の人物に遜色があるためではないので、さすがに作家は正直で、「後記」にはつぎのような後年の述懐が記されてある。

ほかにもう一つ、わたしは気がついたことがあった。すなはち、どうあつかつても崋山は崋山だといふ単純な事実である。かりに後世が棒をもつてたたいても、崋山からはいいところしか出ない。さういふ人物である。そして、仕事はつねに著実であつた。この画人がいかなる時代をもつらぬいて生きのびることをうる秘密はここにあるにちがひない。

これらのことに、いまさらのごとく「気がついた」のは、作家の不敏のせいではもとよりないので、「気がつ」くことを妨げる、ある種の成心がそこに介在していたためである。その成心とは何か、といった問題はしばらく措くとして、その成心が作家と崋山との間に生じさせた「隙間」をこそ、当面の課題としたい。

崋山の「窮屈」な人柄に「隙間」を感じつづけざるを得ぬ作家の眼は「愛情に濡れ」るはずもなく、おかげで、作家は「うつくしい逆上」に見舞われる機会にもめぐりあわせないので、そこには、かの『渋江抽斎』流の世界像が築かれる余地は皆目なかったと言ってさしつかえない。かと言って、崋山を「理想的人格」に仕立てようとする意図が緊要なものである以上、『伊沢蘭軒』の「沈静」とも、おのずからに無縁だろう。その意味で、石川淳における『渡辺崋山』は、鷗外における『北条霞亭』にもっとも近い位地にあった、と言えるかも知れない。だが、鷗外の「理想的人格」としての霞亭が、「鷗外内部の痼疾にあたってゐた」のに対して、石川淳の「理想的人格」としての崋山は、「芸術の迫害者に対して、これを芸術家の典型として立てる」、「そのころ横車を押してゐた官製の通俗道義観に赤恥をかかせる」ために、目下のところ、立てておかねばならぬ仮説にすぎなかった。それゆえにこそ、鷗外は霞亭のなかのいやなものを「ますます身をもつてこれをかばふかと見える」のだし、そこに現出した作品は「流血の文字」となった。しかるに、石川淳の場合は、たとえばつぎのようである。

文政十年、十一年、三十五六歳頃には、家できちんと畏まつて忠孝両全でゐるくせに、外では酣中風狂の態で、近来疎放為レ性、日挙レ白連酔不レ解、狂益甚、貧亦益甚などと尻の黒いことを云つて、なんでえと思はせる部分があつた。その頃は、画に於て、まだ風流韻事しか見てゐなかつたのであらう。地上に有り合せの生活図形を二つ取つて、道徳と風流と両手に花で、その間を徒歩で優游するところの小さな菩薩でしかなかつたのであらう。しかるに、この十年間の運動のうちに、崋山の背中にはいつか金色の羽根が生えて来た。（十三　画道隆盛）

たしかにここには、崋山のなかの「なんでえと思はせる部分」の明示がある。ただし、崋山に対する作家の「異議もしくは不満」は、いわば裸形で読者の前に投げ出されもせず、いわんや、「異議もしくは不満」が拡大、増殖されていくといった塩梅にもならず、ただちに「崋山の背中にはいつか金色の羽根が生えて来た」といった「理想的人格」の形象のなかになだらかに吸収されていくのである。ことのありようは、現下の「画道隆盛」を強調したいために、既往の行状をい

ささか譏ってみせた、とでも言った気味合いなのである。つまるところ、ここに言う「理想的人格」とは、やがて一箇の世界像として結実していくこともなければ、ひるがえって、作家の精神の土壌に深々と根を下ろしてもいないわけで、いわば観念の美麗な切り花にすぎない。したがって、そこに支払われる作家の努力も、あたかもはめ絵にうち興ずるところの精神の徒費にも通うだろう。

総じて、『渡辺崋山』における「理想的人格」とは、可能的生の探究という、精神のダイナミズムをかならずしも内包しないところの、単なる観念の絵模様にすぎないことが、あらまし諒解できたと思われる。ここで論を倒立させれば、かかる精神の不在・空白を、『渡辺崋山』の執筆過程においてつぶさに甜めることによってのみ、『森鷗外』における犀利な分析がはじめて約束されたのである。

崋山伝における、ことにその前半生における貧困・窮乏等の、いわゆる「艱難」が果した役割の意図的な稀釈化の問題は、それに関する記述の絶対量の僅少さを前提とする。だが、記述量の少なさの証明はまことにしにくく、説明に窮する観がある。そこで、貧窮に関する記述の絶対量が乏しいとだけ、ひとまず言っておきたいと思うのである。

それとはいささか異った観点から、多少の補いをつけようとすれば、たとえばつぎのようなことが言えようか。検定教科書の項でも取り扱った、大名行列の先供に打擲されたのを機縁に、崋山が発奮・立志していく経緯を述べた直後、石川淳は語をついで、つぎのような補足をこころみるのである。

かういふ崋山の動きに、またその後の動きに、十二歳の時の屈辱的な事件がひびいて来てゐるには違ひなからう。しかし、その影響の部分をさう過大に見積もることはできない。この事件が起らなくとも、崋山はやはりおなじ方向に進んで行つたであらう。ただ、屈辱が崋山を刺戟して、即座に方向を見定めさせたのだと思はれる。（三　少年〈つづき〉）（傍点筆者）

これを、修身教科書における、「いざ、われも、ふんぱつして、一かどのすぐれたる人となり、人のあなどりを、うけざるほどのものとならん」と比較すれば、立志譚の意図的な稀釈化は明らかである。あるいは、音物の薄きゆえをもって、画の師の謝絶にあったというエピソードも、ことがらに即して叙述されるばかりである。

しかるに、翌年白川芝山は崋山を謝絶した。理由は貧窮のために附届を怠つたと云ふにある。あの時はかなしかつたと、崋山は後に述懐してゐる。行手を塞がれた困惑とともに、世間のいやらしさにまゐつたのだ。（同前）

ここにも、貧窮については、必要最少限のことだけしか述べられてはいない。それとともに、修身教科書風の父親の激励と崋山の発奮といった情景はおろか、貧窮のうちなる勤強・努力も、いささかも要請されるところとはなっていない。言いかえれば、師の謝絶は、「行手を塞がれた困惑」「世間のいやらしさ」として正当に把握されているのみで、「カンナン、汝ヲ玉ニス」といった虚飾の光彩とはまるで絶縁されている、ということでもある。こうしたところから見ても、石川淳の『渡辺崋山』が、修身科教材において形成された崋山像を、否定的もしくは逆接的にしか受容していないことが明らかとなるのだが、つぎの箇所を参看すれば、その辺の事情はいっそう分明となってこよう。

実は、崋山の生活はこのへんから始まると云つてよい。少くとも、伝記作者はこのへんから著手したはうがよかつたかも知れぬ。と云ふのは、今までこの人物は或る限られた図形内に於て、質点として存在してゐたやうなもので、それがどんなに充実せる存在であつたにしろ、後世はいろいろな角度から見る権利を持つてゐるのだから、畢竟何かの軸を使つて、その位置を規定してしまへば、あとは眼を離してゐられるであらうものに属する。おそらく、今までのところでは、当人みづから自分の三日後の成行を云ひ当てることができたであらう。それならば、後世がひどく心配するにも及ばない。伝記作者は今後の生活をさきに見届けておいてから、今までの部分を振り返つても、見そこなふ隈はない筈で、その時たつた一言、やつぱり昔から相当な代物であつたと、さう書いておいても済むであらう。（八　光明の方）（傍点筆者）

ときに崋山四十歳、一藩のうちにあっては、年寄役末席に列して政務にあずかり、世間においては、尚歯会の運動にしだいに身を乗り出していこうとするところに見出せることばである。ちなみに、この作品は三一章から成り立っているのだが、崋山の生涯もあますところ十年ばかりのこの時点までに、わずか八章しか費されていないことは、留目するに値しよう。さきに、崋山の前半生における貧困・窮乏の記述の絶対量が乏しい、と述べたゆえんである。別して、ここにはきわめて重要な語句がいくつか見出される。すなわち、検定教科書が、あるいは国定教科書が腐心してつくりあげた、立志伝中の人物、もしくは孝子伝中の少

年といった崋山像は、それはそれとして一通りは踏襲されながらも、「後世はいろいろな角度から見る権利を持つてゐる」と、たちどころに漂白され、相対化されてしまうので、「その時たつた一言、やつぱり昔から相当な代物であつたと、さう書いておいても済む」と、こともなげに描き捨てられるのである。作家のこうした観方を支えているのは、「今までこの人物は或る限られた図形内に於て、質点として存在してゐた」とする認識で、さればこそ、作家の興味は心然的に、「質点として存在してゐた」個体と、その個体が動き出していったところの場との交渉のありさまにと展開していくのだろう。両者の交渉のありさまが克明に追いつめられていくのは、主に九章以降にかかわるが、それらはつぎの鳥居像の孕む問題と切り離しては論じられないので、ここではそれらの端緒とも呼ぶべき箇所のみを掲げておこう。

一方、藩政改革は藩の政治組織に関係する。もちろん、崋山はすぐに組織全体を革めようと意図したわけではないが、運用上避けがたい部分的な改廃にしろ、それが藩内だけで独立して行はれるものでないと云ふことを、やがて覚つた。藩のうへには幕府があつた。そして、幕府の力は小藩に対してはまだ十分に強大であつた。場合によつては、幕府の威令は藩の人事にまで干渉して来るであらう。藩の政治は幕府の政治一般に於て考へられねばならない。その幕府とは何ものか。（六　中秋歩月）

これはもう、投企された、あるいは所与のこの現実のこの現場で、いかにすればまつたき生存が可能か、といった可能的生の探究の命題と、あわせて「此世の顚動」といった変革の命題と、『普賢』以来、耳に親しい、石川淳の文学におけるあの主旋律のリフレインにほかなるまい。

鳥居耀蔵、小笠原貢蔵、花井虎一の三者が蛮社の獄において演じた、醜陋な役割については、たとえばつぎのようである。

かういふ因縁附の、家伝の原理を持ち出して、耀蔵は政治の支配の側に駆けこんで来て、そこで実際に大目附と云ふ監察の席に坐つた。右の原理で規定された図式どほりに、世の中が出来上つてゐるかどうか、見張らなくてはならぬ。違背するもの、邪魔するものが出て来た場合には、処分しなくてはならぬ。（略）しかも、耀蔵は権力が好きで、権力を剛情に振ふことはもつと好きであつた。それが仕事をも、人間をも、すつかりいやなものにしてしまつた。

この程度の人物を評価するのに、多忙な世間は丹念に首を捻つてなどはゐない。ごく有り合せの尺度をもつて、耀蔵みづから立つところの儒学の倫理を借りて来て、奸邪の小人だと、あつさり片づけてゐる。人間精神の発展にとつて、なるほどかう片づけてしまふのが一番衛生的なのだから、世評は正しいに相違ない。世評もあぢなものである。（十七　水野と鳥居）（傍点筆者）

このような論断は、『文明東漸史』における奸物観・敵役観をそのままに引きついだもので、「為人陰険、権略ニ富メリ」といった鳥居の描かれ方と対照すれば、そのことはおおむね納得できようが、さらに、つぎのような、前掲の『文明東漸史』との相似性、より正確に言えば、シチュエーションおよび字句の酷似のありさまを見れば、そのことはいっそう容易に首肯できよう。

「きさまも同罪だぞ」

がらりと相手の調子が変つた。

初めはいつものとほり、茶が出て、世間噺になつて、気軽に誘ひ出されるままに、もう隠すに及ばないほど知れわたつた例の無人島一件を、いささか得意げに弁じ立ててゐる途中で、いきなり横面を張りつけるやうに、鋭く浴びせて来た一言である。その言葉づかひも、坐り直した恰好も、睨んだ眼つきも、いつもの小笠原ではなくなつてゐた。花井はきよとんとした。そして、狼狽した。既に小笠原の術中に落ちたのだ。

絵入読物の中で見るやうな、こんな不潔な場面をくどくど叙する必要はない。だが、その結果は重大であつた。或る卑劣な男と、或るいくぢのない男との、芝居じみた一場の談合が、やがて志士仁人の運命を泥まみれにするであらう、災禍のきつかけとなつた。（略）

小笠原と花井の合作で、訴状は作られた。花井がそれを持つて、至急鳥居の前に平伏すればよい。しかも、その訴状の内容は、鳥居は先刻承知の筈である。（二十三　小人私議）（傍点筆者）

ところで、こうした鳥居以下の三人の奸物の描き方は、そこだけを単独に取り出せば、石川淳の『渡辺崋山』が、『文明東漸史』の直接の影響下に書かれた、という事実を指摘すればこと足りる。しかし、作品全体の流れから言えば、これはかなり奇妙なことと言わざるを得ないのである。なぜならば、こうした鳥居観

は、先に掲げた、崋山が田原藩の執政として洋学研究と藩政改革の必要をしだいに自覚していく経緯を述べた箇所や、あるいは、尚歯会の運動の性格を規定しようとこころみた、つぎのような箇所と、明らかに矛盾し、不整合を起すからである。

尚歯会は極めて著実な仕事から始めた。蘭書の翻読である。（略）次ぎに、海外事情の究明である。（略）次ぎに、同人の研究の報告である。（略）次ぎに……することは山ほどあつた。（略）そして、結局、かうして得られた智識の各部門を今の世の中でいかに活用するかと云ふ問題になつた。それは今の世の中をどうするかと云ふ問題でもあつた。政治はつい鼻先にぶつかつて来たのだ。（略）

かうなつては、何をどこから突いて行つても、政治にぶつかるほかなかつた。この時代では、学問することの具体的意味がそこに探されねばならなかつた。

しかし、何にしろ、現実の勢力は強権が堅く抑へてゐる。理論など役に立つものかと云ふ常識が大手を振つて通り、理論のないところに決して応用はあり得ないと云ふ、もう一つの健全な常識は泣寝入になりさうでもあつた。そのくせ、尚歯会では、次第に理論よりも実行のほうへ乗り上げて行きさうなふぜいと見えた。現に、一番熱のあがつたのは政策の問題である。当代の頭脳を集めて、叩き抜いたこの政策さへ、精神の夢であらうか。（十　尚歯会）

ここに述べられている幕府の「強権」に、昭和十年代の「強権」の、尚歯会同人に、作家自身のアレゴリーを見出すことほど、容易なことはあるまい。戦時下にあっては、むしろ、その意のあらわすぎることの方をおそれなくてはならないだろう。「この時代では、学問することの具体的意味がそこに探されなければならなかつた。」という論断には、現下の「『マルスの歌』の季節」のさなかで、学問一般、芸術一般における思想の「渇き」に対する作家のやみがたき希求が、さながらにこめられているからである。しかし、わけても重要なのは、「現実の勢力は強権が堅く抑へている」現状においては、天保期の崋山の生のありよう、および尚歯会の運動の性格の究明自体が、とりもなおさず、昭和一六年現在という「今の世の中をどうするかと云ふ問題」として、「何をどこから突いて行つても、政治にぶつかるほかな」い困難な事態と直面しつつも、にもかかわらず、「当代の頭脳を集めて叩き抜いたこの政策さへ、精神の夢であらうか。」という問いかけを、単なる疑問詞から反語へと転化させていかねばならぬとする作家の努力だろう。その努力を代価とすることによってのみ、崋山は石川淳の精神の圏内に親しく招き寄せられるのだろうし、作家は「政治の恣意に依つて描かれた空虚なる観念図形」（『無尽燈』）をつきやぶって、「はじめて歴史のながれに合せるべき現実の呼吸を回復する」（同前）のだろう。いずれにしても、ここに描き出された、思想の「渇き」に立ちながら喘いでいるところの崋山は、いや石川淳はなかなかに美しい。

それはともかくも、現実の政治状況と尚歯会の運動との軋轢、衝突を述べようとした、これらの箇所の力学的、論理的な帰結はおのずからに分明である。しかも、これらの箇所に窺われるごとく、問題の所在とその緒とのみは、余人ならぬ作家自身の手によって示唆されているのである。しかるに、この後、石川淳はにわかにその筆鋒を斂めた観がある。つまり、ここに見られる、二つの軋轢する運動の力学的、論理的帰結は、鳥居一個人の奸物ぶりで説明のつくはずのものでもなく、かつ、説明をつけてはならぬはずのものである。それは、まさしく、「今の世の中をどうするかと云ふ問題」の立て方のなかで問われるべき性質のものである。しかるに、作家は、そこら辺の事情に十分に通暁し、知悉しながらも、鳥居等をあえて「奸邪の小人」もしくは君側の奸として設定することによって、強引に説明をつけようとしているということである。

このように眺めてくると、鳥居を「絵入読物」風の奸物・敵役に仕立て上げているという、見かけの上の印象は、藤田茂吉の著書の場合も、石川淳の作品の場合も、まったくと言っていいほど同じでも、それぞれの背後には、およそ異った意図が伏在したはずである。藤田が、鳥居をあえて奸物・敵役に仕立てあげることによって、漢学と蘭学、守旧と開明、野蛮と文明、迫害と受難、なかんずく幕藩分国主義と近代ナショナリズム、といった対立図式をあざやかに描き分け、そうした対立図式を通じて、自由民権運動の正当性のよりどころを示唆し、あわせてナショナリズムの宣揚をはかったことは、すでに述べた。それに対して、石川淳の作品においては、崋山および尚歯会が直面したものが「今の世の中をどうするかと云ふ問題」だということのみ、すこぶる明晰に提示されながらも、その力学的、論理的帰結が描かれないままに、鳥居の奸物観によってそれにかえられているとするならば、そうした鳥居観の背後に、「わたしの非力では何とも手の出しやう

もなかつた形勢なので、いつか歴史のながれをしてふたたび流れしめ人間のあゆみをしてふたたび歩ましめる底の大きい事件が、いはばひとりでに、向うからおこつて来るであらうのを待つほかなかつた。（『無尽燈』）作家の、しばらくの耐忍を思わないわけにはいかない。「後記」に「過去のユガミ」というゆえんである。ちなみに、こうした「過去のユガミ」に、ただちに作家の退嬰、変節を見ることはたやすいが、「今の世の中をどうするかと云ふ問題」の所在を明示し、「この時代では、学問することの具体的意味がそこに探されねばならなかつた」とおのれに問いかける作家の努力をこそ、今はほめるべきだろう。

以上のことを図式的に要約すれば、藤田茂吉は、明治十年代の現実政治に参加していくために、鳥居らを奸物・敵役として設定することにつとめ、石川淳は、昭和十年代の政治の現実を忌避するために同じことをした、と言っていいだろう。

6

崋山の主張、および、尚歯会の運動自体が、ナショナリズムの要素を内包していたことについては、すでに指摘した。藤田茂吉の『文明東漸史』が、自由民権運動の思想的源流をたずねるかたわら、ナショナリズムの宣揚をはかったことは、すでに述べた。それに対して、石川淳の『渡辺崋山』にはナショナリズムの片影も見えないので、むしろ、そのことに関しては、かたくなに口を緘しているおもむきすらある。

石川淳には、目下取り上げている三笠書房版『渡辺崋山』（昭16・3）以外に、子供向けの、三省堂版『渡辺崋山』（昭17・8）が別に一本ある。三笠書房版の流れを汲む、筑摩叢書版の「後記」によれば、三笠書房版のものは、拘泥するところきわめて多く、ひどく書きあぐねたが、三省堂版のものは、「拘泥するきもちなくすらすら書けた」といった意味のことが述べられているのだが、執筆状態のこうした違いは、単に、大人向け、子供向けといったところに起因するのではあるまい。結論から言えば、三省堂版のものには、ナショナリズムにかかわる言及を解禁にしているといった側面が窺われる、おそらくその問題と密接にかかわるのだろう。三省堂版には見えて、三笠書房版にはない、ナショナリズムに言及した例を、煩を厭うて、一箇所だけ掲げておく。〈注15〉

西洋はおそろしいとちゞんでゐるのは馬鹿者である。西洋がなんだと、何も知らないで空ゐばりしてゐるのも馬鹿者である。西洋にもいゝところがあるのだらう。西洋の学問を習ふのもよい。それでこちらの実力を養はなくてはならない。だが、それがために日本人の道を見失つてはならない。日本人のたしかな心がけをきたへておかなくてはならない。（第一部　少年、二　雪もよひ）

ひるがえって、三笠書房版の作品について言えば、崋山の主張、および尚歯会の運動の持ったナショナリズムの側面は、あらかた捨象されてしまっているので、わずかに『慎機論』『鼓舌或問』等の引用部分に、その片鱗をとどめているにすぎない。

ところでナショナリズムの宣揚が、国民精神発揚の一方法として、もっとも時宜に適った戦時下において、『渡辺崋山』が具有するこうした傾向は、かなり奇妙なことと言わざるを得ない。ここに、戦時下における石川淳の、ひそやかな抵抗の姿勢の一斑を読みとっても、あるいはさしつかえがないように思われるのである。

しかし、こうしたこころみは、一方では、ナショナリズムの問題を抜きにしては、尚歯会の運動、および蛮社の獄そのものの実態と意義とがわかりにくくなってしまうといった、崋山伝としてはほとんど致命的な欠陥にもつながらざるを得ない。そこではじめて、鳥居等がことさらに奸物・敵役として設定される理由もようやく納得がいくし、あわせて、崋山が理屈ぬきに「理想的人格」として描かれる必然性もまた、そこにあると言えよう。

だが、崋山伝の持つ、修身科教材風のひたすらなる勤勉・努力の策励の欺瞞性を稀釈し、かたわら、『文明東漸史』に見えるナショナリズムの側面を捨象することによって、戦時下における文学的抵抗が完成するならば、話はいたって簡単なのだが、そのためには崋山を「理想的人格」に仕立てあげざるを得なかったので、そこに出来上った崋山もまた、すこぶる時宜に適ったものとならざるを得なかったのである。そこで、石川淳は、崋山を「理想的人格」に仕立てあげることによって、「その当時横車を押してゐた通俗道義観に赤恥をかかせる」といった強弁を用意するわけだが、かかる陰微な譏刺が戦時下の現実の前にはなにほどの有効性をも持たないことは、あらためて贅言するまでもあるまい。

かくて、何を、どのように書いたところで、所詮は体制翼賛にしかならない、といった鬱屈したもどかしさと、みずからの精神的膂力の絶対的欠乏の自覚とに、

戦時下の石川淳は身を嚙まれつづけなければならないわけで、戦後、それらが一挙に爆発するところに、『黄金伝説』『焼跡のイエス』等における、歴史の最深部からの根源的変革、といったきわめて性急な願望の表白が行なわれる理由がある。戦後の諸作品に流しこまれた、すこぶる前衛的な情念こそ、『渡辺崋山』をはじめとする、戦時下の作品の執筆過程において、いわば負のかたちで、あらかじめ準備されつづけたものにほかならない。

注1　井沢義雄『石川淳』（昭36・6、弥生書房）一七四頁参照。

注2　『渡辺崋山』は、昭和一六年三月、三笠書房から、『義貞記』は、昭和一九年二月、桜井書店から、いずれも書き下し単行本として刊行された。その後、両著ともに、昭和三七年八月、筑摩書房版『石川淳全集』第八巻に再録された。その際、『義貞記』は「昭和三十七年二月しるす」の刊記を持つ「附記」を有することとなるわけだが、『渡辺崋山』の方はさらに遅れて、昭和三九年三月、筑摩叢書の一冊としてみたび梓行されるときに、ようやくにして「後記」を持つことになる。

注3　石川淳の『渡辺崋山』につぎのようにある。

「崋山と云ふ号は最初の儒学の師、鷹見星泉がつけてくれたもので、もと艸冠の華山であつたが、後に（三十歳頃だと云ふ）支那五岳の一である崋山が山冠なのに従つて、さう改めた。」（一　出生）

諸種の文献には、華山・崋山二様のあらわれ方をするので、以後は、逐一、これを注しない。ただし、地の文については、通有の崋山に統一した。

注4　『文明東漸史』の本文は、『明治史論集㈠』（『明治文学全集』第77巻、校訂松島栄一、筑摩書房）によった。ただし、傍点等は煩を厭うて、これを省いた。なお、『明治史論集』には『文明東漸史』「外篇」を収録しないので、大正一五年三月、聚芳閣から刊行されたものを参看した。

注5　特旨贈位に関しては、しまね・きよし『転向――明治維新と幕臣――』（昭44・2、三一新書）に、委曲を尽した考察がある。

注6　修身教科書の分析については、見田宗介「『立身出世主義』の構造」（『現代日本の心情と論理』所収、昭46・5、筑摩書房）に裨益されるところが多かった。

注7　修身教科書の本文は、『日本教科書大系・近代編』（昭37・3、講談社）第二巻および第三巻所収のものによった。

注8　『森銑三著作集』（昭46・3、中央公論社）第六巻、二一頁参照。

注9　初出のものを見得なかったので、『渡辺崋山―夜明け前のエレジィ―』（昭46・3、造型社）によった。他に、角川文庫版（昭29）のものがある。

注10　『日本思想大系55』（校注佐藤昌介、岩波書店）参照。

注11　注10に同じ。

注12　崋山伝の類書で、管見に入ったものをあげれば、『渡辺崋山』（渡辺霞亭著、明41・2、弘文書院）『修身教科書伝』渡辺崋山言行録』（堀江秀雄著、大6・6、東亜堂書房）『教訓叢書』渡辺崋山百話』（大庭三郎著、大6・6、求光閣書店）、『立志教訓』渡辺崋山』（松雲堂編輯所編、大7・1、石塚書舗）等がある。

大隈重信、加藤弘之、下田歌子等の序文を巻頭に掲げた、碧瑠璃園主人渡辺霞亭の作品における発明は、河村八馬という敵役の創造だろう。この敵役の創造によって、霞亭の作品は、立志譚という骨子のほかに、雪辱譚・復仇譚という、今一つの側面をあわせ持つことになる。こうした崋山伝の歪曲は、日清戦後の三国干渉、臥薪嘗胆、日露戦役による雪辱・復仇といった、日露戦争の通俗的理解と微妙に照応している。

他の三書は、「修身史伝」「教訓叢書」「立志教訓」などと銘うたれているように、いずれも「現代の吾が少年者の模範」「亀鑑」の用に供しようとするものである。しかし、それと同時に、たとえば『渡辺崋山言行録』のごときは、遠く海彼の第一次世界大戦を眺望しつつ、英露の東亜進出をはばむかたわら、「日支同盟、日支同化、日支合邦」へと進展していく、気宇壮大なロマンの片影を具有している。

注13　石川淳『渡辺崋山』の本文は、三笠書房版のものによった。ちなみに、各引用の末尾に掲げた見出しは、三笠書房版および三省堂版にのみ見出される。

注14　注9に掲げた藤森成吉の著の「序文」に、同様な箇所をあげて、「形而上学的讃美」「唯心論的観念論的解釈」と呼んでいる。評価のちがいはあれ、石川淳の作品の持つ「理想的人格」のことさらな形象についての指摘という点では、筆者の指摘と矛盾しない。

注15. 今一つ、例をあげておこう。

〈その時、鈴木春山がいきなり大きな声を出した。

『長英さん。あなたはしきりに西洋の新しい学問といって、西洋をありがたがるやうだが、いったいその学問を何のために使ふつもりだ。』

長英の太い眉がぴくりと揚った。

『何のためとは、知れたことだ。強い、新しい、りっぱな日本をつくるためだ。われわれは勇んでその捨石になる。今から、その下ごしらへに取りかゝるのだ。』〉（第三部　壮年、一　江戸の蘭学）

（1976・7・20）